

公開研修会 講演記録

「現代の子どもの姿」

～ 地域全体で子どもをはぐくむために ～

- 日 時 平成18年7月19日（水）14:30～16:30
- 場 所 大阪市教育センター 講堂
- 講 師 大阪市スクールカウンセラー
臨床心理士 良原 恵子

この「講演記録」は、当日の雰囲気味わっていただけるよう、当日の講演内容をもとに、講師の良原恵子さんに加筆修正していただいたものです。

（尚、この講演での事例は、講演内容の理解を深めるために、複数ケースを合成して話されたものであり、実際のケースそのものではありません。）

☆ はじめに

ただいまご紹介いただきました良原です。今から約1時間半の時間、皆様方と御一緒させていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

ちょうど、これぐらいから眠たくなる時間ですね。ふだんの私の仕事は、スクールカウンセラーとしての1対1の面接が中心です。保護者と一緒に来る子どもと会ったり、先生と一緒に来てくれる子どもたちと会ったりもしますが、どんなに多くても、3人以上、4人以上の方と一度に会うということはあまりありません。

大学の授業でも、実習が中心です。実習は定員が15名までと決まっています。15名以上のクラスを幾つか持つてはいますが、今日のようにたくさんの方がいらっしゃると、それだけで、大変緊張してしまいます。なので、話がかたくなって、皆様を別の世界へお連れしてしまうのではないかという心配があります。

ですから、私自身の緊張を少しほぐさせていただくために、ここでひとつ肩もみのワークをさせていただきたいと思います。

☆ ウォーミングアップ

では、2人1組で肩もみをする相棒を探し、ペアをつくっていただけますでしょうか。残念ながら、3人とか1人でお座りの方は、周りを見渡し相棒を見つけていただけたらありがたいと思います。荷物はそのまま構いませんので、移動していただき、肩もみの相手をお探しください。相棒、見つかりましたか。

スタートと言ったら始めてください。いいですか。では、肩もみを90秒間やってもらいます。ペアですので、AさんがまずBさんの肩をもんで、「はい、終わり」と私が申し上げましたら、選手交代で、BさんがAさんの方をもむというふうにします。よろしいでしょうか。

どうぞ、立ち上がるなり、座ったままでなり、寝転がるなり、上着を脱ぐなり……。 「よいスタート」と言ったら始めてください。いいですか。もうすでに盛り上がってい

るようで、恐縮ですが、「スタート」と言ってからしてください。今日私はマイストップウォッチを持ってまいりましたので、これで正確に90秒計ります。どうぞおしゃべりをしないでやってください。いいですか。しゃべってははいけません。黙ってします。では90秒ですよ。

「よいスタート。」

「しゃべってははいけませんよ。」

「はい、ストップです。」

「じゃあ、次、選手交代です。」

今からご参加いただく方も、どうぞお近くの方と相棒になって、肩もみをどうぞ。

選手交代です。いいですか。では、選手交代をした上での2回目の肩もみ、同じように黙ってやってくださいね。

「よいスタート。」

「はい、終わりです。」

では、もう一度選手交代、もとに戻ります。最初の肩もみのパターンでやります。ただし今度は、どうぞご自由にお話をされながらの肩もみ、同じく90秒です。後から参加された方とか、肩もみをしたくない人は、どうぞ周りをよく観察していただけたら…。いいですか。では90秒、お話をしながらの肩もみです。

「よいスタート。」

「はい、終わりです。」

「では、選手交代です。同じようにまた90秒、おしゃべりをしながらの肩もみ、お願いします。」

「よいスタート。」

「はい、終わりです。」

どうもお疲れさまでした。

この“肩もみのワーク”は、大学の授業やいろいろな研修でも行われているワークです。黙ってする肩もみと、お話をしながらする肩もみ、それから肩をもむ方の役と、もんでもらう方の役と、4つのパターンで肩もみというものを経験していただきました。ここから私たちはいろいろなことを学ぶことができます。

肩もみというのは、“体の凝りをほぐす”それから“相手に対していい気持ちになってもらう”、格好よく言えば、“相手を援助する”“サポートする”ということにつながるのではないのでしょうか。“体の凝りをほぐす”ことと“心の凝りをほぐす”ことは関係があると考えられ、この作業からいろいろなことを学ぶことができます。今日はちょっと時間がないので、簡単にこのワークから学べることを4つ、まず、簡単にお伝えしたいと思います。それが、今日のお話をさせていただくことの基礎になるかなと思います。

まず1つ目は、“言葉”というものが非常に大切だということです。どういうことかといいますと、黙って肩もみをしてくださった時と、おしゃべりをしながら肩もみをしてくださった時では、同じように正確に90秒肩もみをしたのですが、黙ってされた時の方が、時間が長く感じられたのではないのでしょうか。

また、お互い知り合い同士の肩もみの方が多かったと思います。もし、お互いが全然知らない人同士とする肩もみの90秒ですと、その90秒がもっと長く感じたり、その場の空気

がピーンと張り詰めたり、緊張したり、そんな感じがきつとしますね。肩をもむ方も、もんでもらう方も、そのように感じる。

それはなぜかという、いろいろな理由が考えられます。1つの理由は、黙ってすると不安が起こるからということです。どういう不安が起こるのでしょうか。肩もみをする時、「相手の凝りをほぐそう」とか「相手の役に立とう」、相手に「『ああ、気持ちいいなあ』と思ってもらいたい」と思って一生懸命肩をもむのですが、黙ってしなくてはいけない時は、自分のやり方がこれでいいかどうか、相手に尋ねることができませんね。「力の加減、これぐらいでいいですか」とか「首の方が凝ってる様な気がするけれど、肩より首の方を押しましょか」「自分はもむのは苦手だけど、たたくのが得意なので、たたく方に変えていいですか」など、相手に確かめたいけれどもできない、これでいいのかも分からないし、相手がどう思っているか、満足してくれているのかもわからない。

もんでもらっている方の人も、「痛い、もうちょっと弱くしてほしい」と思っても言うことができません。逆に「そこが気持ちいいのに、あ、また違うところへ行ってしまった」とか、「もうちょっと強くしてくれないかな」「全然ちがうわ」などと思っても、伝えることができない。つまり、いくら相手の役に立ちたい、もしくは相手に助けてもらいたいと思っても、言葉がないと相手がどう思っているのかもわからないし、自分がどう思っているかを伝えることもできない。つまり、自分の気持ちも相手の気持ちも、互いに確認ができない。このことが私たちの心に不安を生じさせ、時間を長く感じさせたのではと思います。

ですから、きつとお話をしながらの肩もみの時には、「この辺でよろしいですか」とか「どこ凝ってはりますの」「強さはこれぐらいでいいですか」などの話が、最初に交わされたのではないのでしょうか。

私たちは、よく「子どもの気持ちを理解することが大事だ」とか「相手の気持ちをわからなきゃいけない」と簡単に言います。しかし、そのためにはまず言葉をかける、かけ合うということがとても大事で、「言葉はとても大事だ」ということが、まずお伝えしたいことの1点目です。

2点目です。もう一度無言で肩もみをしていたときの感覚を思い出してください。肩をもむときにどれぐらいの強さがいかわからないので、肩をもんでおられる方は自分の指先に全神経が集中していたのではないのでしょうか。微妙な力加減を試みたり、ミリ単位で指を動かしてみたりと、すごく集中しながら行われたことと思います。しかも肩もみというのは相手の顔が見えないので、もんでもらっている相手がどう思っているのかがわかりにくい。だから、「自分はこれぐらいでいいと思うのだけれど」「ここが凝っているのでは？」と思いながら、全神経を指先に集中させ、しかも心の中であれこれ試行錯誤をするわけです。また、「全体的にした方がいいかな」「集中的にここだけがいいかな」と自問自答をしながら、相手の後ろ姿をよくうかがいながら、肩もみをしておられたのではないのでしょうか。

ところが、おしゃべりをしながらの肩もみの時はどうでしょう。その試行錯誤、心の中での自問自答は吹き飛んでしまったのではないのでしょうか。

おしゃべりをしながらの場合は、先ほど“言葉”が大切と申しましたように、「これぐらいの強さでよろしいか」と言葉で直接聞くことができますし、「あ、すみません。そこ

は凝っていないから、もうちょっとこの外側をやってくれますか」と伝えることもできる、つまり言葉で伝えることができるので、何も自分だけで試行錯誤、自問自答をする必要がなくなったわけですね。

先生方はもちろんのこと、ここにいらっしゃる皆様方もそうだと思うんですが、子どもたちに「おはよう」と声をかけたり「何か元気ないねえ」と言ったりした時に、「別に」とか「大丈夫」と言っても、「声のトーンがいつもと違う」とか「顔つきが何か違うな」と、言葉以外の様子から感じたり、察することをノン・バーバル・コミュニケーションと言います。{言葉=バーバル}以外の、{ノン・バーバル=表情、様子や行動など}から、私たちはその子どもの気持ちをくみ取る場合があります。言葉をかけることは大事ですが、それと同じぐらいに、言葉以外からのメッセージをどのようにくみ取っていくか、これも大切なことなのです。

言葉は大事ですけれども、言葉だけが大事なのではなくて、言葉と同じように、言葉以外の表情や様子、状態、声のトーン、子どものメッセージをそれらからも受け取ることができる。このことが2点目です。

3点目です。「お話をしながらの肩もみをしてください」と言いましたときに、多分、初めの5秒か10秒ぐらいは、「これでよろしいか」とか、「肩もみの力の強さ、どうですか」とか、「ああ、気持ちいい。それでお願いします」という会話があったでしょうが、残りの80秒は皆さんどんなお話をなさいましたでしょうか。

「我が校区におけるはぐくみネット事業の現状と課題」など有意義な話をされた方は、どれぐらいいらっしゃいますでしょうか。いらっしゃいませんね。きっと「天気、雨やからどうしようかと思ったわ」とか「お昼ごはん、どうしたの」とか「私、少し太ったわ〜」など“どうでもいい話”を多分されていたと思います。実は、この“どうでもいい話”がとても大事なことなのです。これが3つ目です。

私は、スクールカウンセラーという立場で、定期的に毎週行かせていただいている学校もあるのですが、スクールカウンセラーの経験が長いということもあり、緊急時とか、突然びっくりするようなことや困ったことが起こったときに、危機介入、緊急支援として集中的に学校に行くということも時々あります。いろいろな事故や事件に巻き込まれてしまった子どものいる学校に行かせていただいた時に、「こんな子どもやからこんな事件を起こしたんや」とか「あんな親やから、あんな家庭やから、こんなふうになったのどちがう？」とか「こんな学校だから」「あんな地域やから」。そういう共通性は全くないんですね。つまり、逆に言えば、どんな子どもであろうと、どのような家庭環境であろうと、どんな学校であっても、どんな地域であっても、今の複雑な社会の中ではどのような事件が起こっても不思議ではない、どんな事故や事件に子どもが巻き込まれても全然不思議ではない、非常に難しい時代の中で私たちや子どもは生きています。

緊急派遣として学校や地域に伺わせていただきました時、一番強く感じることは、事件が起こるまでが問題なのではなくて、事件が起こってからが大切ということです。どうということかと申しますと、日頃から声かけをしあっている、特に地域の方々が互いに「おはよう」とあいさつをしているとか、近所のおっちゃんやおばちゃんの顔見知りが多い、学校の子どもたちが、「あそこのおっちゃん知ってる」とか、「角の信号のところのおばちゃんは、いつも声かけてくれるけど、赤信号で渡っているところを見られたら

うるさい」とか、そういうふうなかかわり方、いいことでも、多少悪いことでも、“毎日の生活の中でつながっている、普段から何げない日常の会話が地域で行われている”ということが大切なのです。また、学校の中でも先生と子どもがワイワイと勉強以外の話をしている。「きのうの晩御飯こんなんぞな」とか「先生、きのう、お父ちゃんとお母ちゃん、すごいけんかしてんで」などいろいろな話がされている、また職員室の中でも、先生同士のおしゃべりが弾んでいる。そういう会話のある、おしゃべりのある地域や学校では、どんなトラブルが起こっても、そこから回復していく力が強いと感じます。

ですから、いざ何か困ったこと、大変なことが起こった時に「えらいこっちゃ、さあどうしたらいいか」「解決策をみんなで考えよう」「有意義な話をするよ」というふうに言っても、「日頃しゃべったことない」「あいさつをしたこともない」また、「話をしたら、『くだらんことを言うな』」といつも怒られている」という人間関係では、なかなか有意義な実のある話にたどり着くのに時間がかかるわけです。平素からあいさつをしている、ちょっとした会話が行われている、お天気の会話でも何でも構わないです。私はよくそれを“風通しがよい”と言っていますが、風が止まるとその場の空気がよどみます。ですから、風がよく通っている、地域の中をいろんな風が吹いているということが、地域の子どもを支える力につながっていくのではないのでしょうか。

ですから、今、肩もみでも、きっと大した話をしてなかったけれど、むしろおしゃべりをしながらの方が、「ああ、気持ちよかった」「楽ちんやった」と思っていた度合いは高かったと思います。そのことも、身をもって経験していただきました。

最後に、4番目です。「では、今から始めます」と言ったとき、パッと立ち上がって肩もみの用意をされた方もいらっしゃいますし、上着を脱いで肩もみをしてもらう準備をされた方もいらっしゃいました。またハンカチやタオルを出してきて、それを首に当てて肩もみをされた方など、いろいろな方がいらっしゃいました。

このことからわかるように、普段、私たち素人がする肩もみの場合、正しい肩もみの仕方、正しい肩もみのされ方というものはないということです。その人にとってやりやすい形、してもらいやすい形、それが一番いい方法です。同じように、子どもをサポートする時、子どもに何か援助をする時に、“正しい声かけのあり方”“正しいサポートのあり方”というものありませんし、“正しい助けてもらい方”というものもないわけですね。子どもによって違うし、大人によっても違う。

例えばA君には、とても甘えん坊のところがあって、いつも大人にまつわりついてきたり、突っかかってきたりするから、こちらもしょっちゅう「どうしたん？」と声かけをする。するとA君は「別に」というけれども“にっこりする”ということがあるとします。その「どうしたん？」という声かけがA君にとっては元気をもらうことになる。しかしB君は、余り声かけをせずに、ちょっとそばから黙って見ている方が、その方がB君は安心するかもわからないのです。

ですから、子どもの力になる時、子どもがどんなに助けてほしいと思っても、その援助のされ方は子どもによって違うわけです。

大人の方も、声かけするのが得意な大人もいれば、じっと見守るという形で携わることが得意な大人もいる。一緒にキャッチボールしたり編み物をしたりと、一緒に何かすることを通して子どもを援助することが得意な方もいらっしゃれば、そういうことは苦手だけ

れども、黙って一緒に座っているだけでも、子どもはいつもホッとした顔でいる、そういう雰囲気をもっている大人もいらっしゃると思うんですね。

つまり、“いろいろな大人がいる”ということが大事です。常に活発で、お話が上手で、子どもと走り回っている、そういう人だけがコーディネーターに適しているわけではなく、そういうコーディネーター、サポーターの方も必要だけれども、そうじゃない、全然違うタイプの方も必要であり、いろいろな援助の仕方、され方、子どもとのつながり方があるのです。そのことも、肩もみという身近なワークで経験していただきました。

今、4つのことを申し上げましたが、そのことを踏まえ、次にもう少し具体的な話をレジュメに沿って進めさせていただきます。

☆ カウンセリングルームで出会った子どもたち

今日は、大阪市のスクールカウンセラーということで参りましたので、ちょっとスクールカウンセラーの宣伝もさせていただきたいと思います。大阪府は平成8年、ですから10年以上前から大阪府129校全部の中学校に、週1回、もしくは月1回という差はございましたが、スクールカウンセラーがいるんですね。こんな画期的なことは、日本中でも多分大阪府が一番だったと思います。今は全部の中学校に毎週1回、スクールカウンセラーが朝の8時半から5時15分までいます。

大阪市のスクールカウンセラーのシステムのすごいところは、電話の事務局、受付事務局というところがあって、そこに電話で予約をすれば、その中学校の生徒や保護者や先生だけではなくて、大阪府立の幼稚園に通っておられる方から、市立の高校に通っておられる生徒、保護者や先生、誰でもが利用できるということなんです。

例えば、私が今A中学校というところのスクールカウンセラーをさせていただいているわけですが、そこにはA中学校の生徒だけではなくて、そのご近所のB小学校の子どもさんが相談に来ることもあれば、少し遠いところに住んでおられる保護者が仕事でA中学校の近くに来ているので、A中学校のカウンセリングルームに相談に来ることができるということです。もちろん地域の、地元の中学校のカウンセリングルームが一番近くて便利だと思いますが、そういうふうな様々な事情に配慮し、大阪府内どこのカウンセリングルームでも利用することができるわけです。もちろん、児童生徒自身や教職員、保護者も利用できます。

私が時々経験するのは、「A中学校の生徒なんだけれども、A中学校のカウンセリングルームに行くと、友達の間があるから行きたくない。」「子どもが学校に来るのを嫌がるので、隣のB中学校のカウンセリングルームを活用したい」、そういうこともできる、柔軟性のあるシステムになっています。

小学校の子どもたちや保護者の方がカウンセリングルームの受付に電話すれば、そこで予約がとられ、プライバシーが守られた形で相談に行くことができる。それが非常に画期的な、地域の皆さん方への、スクールカウンセラーがお役に立てる1つの方法だと思います。

そういう中で、私はたくさんの中学校を回り、いろいろな子どもたちに出会ったわけです。今日はその中で、いろいろな私の経験した例からのお話をいたします。

予約をとって来られる方、もしくは予約をとられずに突然来られる方もいて、もちろん

相談内容も様々です。子どもが学校へ行かない、行きたくても行けない、もしくは行こうとしない、いわゆる不登校のご相談に来られる方もいらっしゃいます。最近増えたと思うのは、子ども、特に中学生、高校生の女子に多いと思うのはリストカットですね。しかし、そのような相談ばかりではなく、何気ない相談もたくさんあります。

例えば、お母さんたちでつくっている「おしゃべりしません会」というグループがあります。「子どものお小遣いどうしてます？」とか「子どもが『携帯を買ってくれ』とうるさいけど、よそのお家はどうしているの？」「『うちの家の門限は厳しすぎる』と子どもが言うが、心配だし…」など、とっても日常的な、ちょっとしたことをカウンセラーも一緒に入って、そのグループで話し合っています。また、いくつかの学校では昼休みと放課後に、オープンルームといいまして子どもたちに部屋を開放したこともあります。予約が優先ですが、予約がない場合は部屋を開放していて、子どもたちが自由に来れるようにしていたのです。

♪ 「ひまつぶし」、恋愛相談→自主性、「あとがないねん！」

オープンルームには、男子生徒だけが複数来るときもあれば男女両方の生徒が来るときもあります。1年生しか来ない学校もあれば、1～3年生が来ていて「3年生は先輩なので、緊張するから行きにくい」と1年生の子どもたちが言う場合もあります。いろいろですが、まず女子生徒の相談の半分ぐらいは、恋愛相談が多いですね。「そんなしょうもない相談をしているの！」と思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、恋愛相談というものは子どもたちにいろいろなことをしっかり考えさせる、とてもすばらしい相談ではないかなと私は思っています。

例えば、「良原さん、あんな、好きな子がおるからな、告ろうと思てるねん。手紙がええと思う？電話がええと思う？それとも待ち伏せして直接がええかなあ」とか言う子がいるんですね。「待ち伏せとはすごいな」と思いながら「うーん、難しいな」と言うと、次に子どもが「みんなな、手紙がええって言う。だから、私も手紙にしようと思うねん」と。大体相談してくるときは、あらかじめいろいろ考えてくることが多いです。「手紙？ああ手紙もええなあ」と私が言うと、「そやろ、やっぱり手紙やんな。メールも思てんけど、転送されたらあかんし」とか「手紙の方が雰囲気あるやんなあ」と子どもたちはあれこれよく考え、それを言葉にして自分の気持ちに少しずつ気づき、そしてさらに、子ども自身自身が具体的に考えをすすめていきます。

「手紙な、郵便切手貼って郵送するのと、黙ってその子の家のポストに入れるのと手渡し、どれがええと思う」と言うので「うーん、それも難問やなあ、難しいなあ」と返すと子どもたちはますます、いろいろと考え、その思いを言葉にします。

“好きになる”という気持ちは理屈ではなく、心の動きとしては突然起こること、自分ではどうしようもない感情です。そのせいか、同性同士の友達のトラブルよりも恋愛相談の方が、子どもたちは必死に、しかし素直に考えるような気がします。

例えば中3の、4月、5月ぐらいになると急に恋愛相談が増えます。なぜかという、もうすぐ修学旅行があるからです。修学旅行でいい思い出をつくるために彼氏、彼女をつくりたい。「だから、もう後がないねん。今週中に彼女をつくらなあかんねん」とか言ってくる。

保護者や先生の立場に立てば、もしかしたら「そんなこと考えている間があるのやったら、英単語の1つも覚えたらどうなの」と言いたくなるかもしれませんが、子どもらは真剣に恋愛相談、「好きになった」「彼女や彼氏がほしい」「嫌われたくない」などの思いから、人間関係についていろんなことを学び、考えていきます。

人間関係、特に恋の悩みはなかなか思うようにならない。ある生徒が「良原さん、先週な、思い切ってな、手紙渡して、その場で読んでと言って読んでもろてん。けどな、相手の子、わからんて言うねん」それで彼女は「わからんて、私のことを好きか嫌いかわからんということ？」と相手の男子生徒に詰め寄ったらしい。するとその男子生徒が「そうや」と言う。「そしたら友達としてはどう」と女子生徒はさらに積極的に尋ね、また「わからん」と男子生徒が言うものですから、焦ってきた彼女は「49と51の比率でもいいから答えてって言ってん」「それでもわかれへんやて。だから3日後までに答えるようにと言って宿題にしといた」とどんどん詰めていく。大抵、こういう場面では、女子生徒の方が積極的なようです。ところが、そういう強気の女子生徒も、1日たち、2日たち、3日たつと、だんだん不安が出てきて、次の週のカウンセリングルームではため息ばかりつき、「良原さん、思うようにこの世はならへんな」というふうにポツツと言ったりするわけです。

本当に、周りから見れば、どうでもええようなことかもしれませんが、このような経験を通して、そこで自分の本当の気持ちはどんな気持ちなのか、相手はどう思っているんだろうかと、自分自身のことや他人のことに少しずつ気づき、そこからまた真剣に考える。そこから学んでいくのではないかと思います。

♪ “何となく来た” “そばに寄ってこない” 子ども: どうでもよい話、その場にいるだけ →beingの空間を大切に

レジュメの4番目の音符のところに、「“何となく来た” “そばに寄ってこない” 子ども: どうでもよい話、その場にいるだけ」と書いています。オープンルーム、フリールームをしていると、時々、私には近寄らないけれども、だけど毎週来るといふ子がいます。カウンセリングルームの部屋の隅に寝転がったり、部屋にあるいろんな本をパラパラッと見ているとか、友達同士でしゃべっているとか、折り紙したり、室内にあるゲームをやっていたり。別に私に用があるわけではなく、けれどもそこにいる。何となくそこにいるんですね。

このことから私はいろいろなことを感じます。1つは“being”という空間の大切さです。“being”とは、“存在する” “いる” “ある”ということです。存在するだけ、別に何もしなくてもいるだけでOK、“being OK”ということです。

学校という場所は、御存じのように、doingをする場所です。動詞には、be動詞とdo動詞、2つの動詞の種類があります。doingというのは例えば、「勉強する」とか、ボールを「投げる」、「走る」、理科の「実験をする」、何かを「つくる」、そういうふうになにかする、動作を表す動詞です。

学校の中での“doing”は他にもたくさんあります。漢字を「覚える」、九九を「習う」、何回も何回も「練習する」、「学ぶ」「繰り返す」「頑張る」「一生懸命する」そしてそうすることによって「できるようになる」「上達する」、また友達を「作る」

「仲良くする」、これらはすべてdoingということになると思います。

doingを通して、知識や技術を学び、そして上達することは学校の間では大切なことです。一生懸命何か学ぶ、練習する、繰り返すということを通して、努力する、根気をつける、我慢する、集団で取り組む、経験を通して学ぶというふうに、たくさんの、勉強、知識だけを学ぶだけではなくて、知識を学ぶことを通して、知識以外のことも身につける、それが学校という場の特徴の1つです。

例えば、休み時間に縄跳びの練習をする。そうしたら、二重跳びが3回しか飛べなかったが、1週間練習したら10回飛べるようになった。さらに「やったあ」という、達成感を味わう。全てdoingです。

しかし、doingと同じように大切なことは、beingということです。九九は言えないよりは、もちろん言えた方がいいし、練習しないよりは練習をした方がいいです。そのことを子どもたちはしっかりと学び取っていかなくてはいいませんが、その一方で“being OK”つまり、“何もしなくてもあなたがここにもOK”“それでもあなたはいいんだよ”という実感をしっかり味わうことも大切です。

つまり、極端に言えば、ボーッとしていても、頑張らなくても、「またこんな点取ってきたんかいな」という点を取ってきても、「それでもこの子はここにいるいい」「この学校にいい」「うちのクラスの大事な子だ」「うちの家の大切な子だ」「この地域の子やで」と、そういうふうに大人が思っているということが子どもにしっかり伝わっているかどうかです。

案外、子どもは大人が思っているほど「僕は、お父さん、お母さんから大事に思われている」とか「先生は僕のことを心配してくれている」とは思っていないと、子どもたちと話をしていると感じます。

例えば、「テストの点がまた悪かった。きっとお母ちゃんは、またため息をついて、僕のことを恥ずかしいと思うに違いない」。そんなことをポロッと言うわけです。

“being OK”とは、生まれたての赤ちゃんを初めて見た時の感激とか、赤ちゃんの寝顔を見ているだけでほっとする時の感覚とつながっています。別に赤ちゃんは意識的に何かを頑張っているわけでもありませんし、お手伝いをしてくれるわけでもなく、実際に役に立つわけでもありませんが、「この子の寝顔を見ているとほっとする」「元気がわいてくる」「つらいことが一瞬でも忘れられる」そこから「ああ、いてくれるだけでうれしいな」という思いにつながっていく、「とにかく無条件でかわいい」、そういう感覚ではないかなと思います。

「這えば立て、立てば歩めよの親心」という言葉があります。それは「うちの子は幸せになってほしい」「悩みなんかもたないで、明るく元気にすくすくと育ててほしい」という、我が子であれば“親ごころ”、クラスの生徒であれば“先生ごころ”、そういう心を私たちはもっています。また、地域でかかわっている子どもに対しても、“おとなごころ”を私たちはもっています。しかし、そういう“おとなごころ”をついつい敏感に受け取ってしまい、「頑張らないと認めてもらえない」「先生は、僕のことをかまってくれるのは、僕が頑張っているからや」となる場合があります。

例えば、成績も運動も優秀な子どもに出会った時の話です。彼は水泳の選手で、地域の記録とかを持っている。とても有望で、「ぜひ我が校に来てほしい」という高校がた

くさんあるという生徒でした。彼が私に何を話したかという、「今度いいタイムが出なかったらどうしよう」「優勝できなかったら…」という心配でした。「担任の先生やクラスメイト、先輩も後輩も僕に声をかけて励ましてくれるのは、僕がいい記録を出すからと違うか」また、「顧問の先生が『調子はどうだ』といつも気に掛けてくれるのは、僕が頑張っているからで、もっともっといういいタイムが出せると思っているのでは？」

「じゃあ、もし、次の試合で負け、いいタイムが出せなくても、それでもみんなは僕に声をかけてくれるだろうか。それを思うと、次の試合が怖い。出れない。練習に集中できない」ということを切々と訴え続けたわけです。

もちろん周りは「いいタイムを取らなかったら口をきかない」なんて全く思っていない。先輩後輩もクラスメイトもそして先生方も彼のことを誇りに思いこそすれ、彼が心配しているようなことは全然思ってもいないわけですが、彼自身はそのことで夜も眠れない、ということがありました。

「早く泳ぐ」「そのために頑張る」「チャレンジする」などの“doing”は非常に大切なことですが、それと同時に、私たちはdoingがうまくいなくても、「beingだけでもOKだよ」という、そのメッセージをどのように与えていくのかということも子どもたちにかかわるにあたって大事なことです。

そういえば、今思い出しましたが、極端に心配する子どもがいました。それは友人とのトラブルですごくもめ、相談に来た女子生徒です。「私が学級委員をやったり、テストの勉強を頑張ると、お母さんはにっこり笑って、『行ってらっしゃい』と言う。地域のおっちゃんやおばちゃんも、横断歩道を渡るみどりのおばさんも『おはよう』とってくれる。ところが、怠けたり、いい点を取らへんと誰も声かけてくれへん」と。そんなことないですよ。お母さんはともかく、地域の方々が、その子が毎回何点取ったかなんていうことはわかるはずがないのですが、けれども、その子はそう思っている。そう感じている。このように「周りの人の期待に応えたい、でも応えられなかったらどうしよう」という期待と不安、そういう気持ちをもつことは特別なことではありません。しかし、「いい子でなければだめだ」「絶対、うまくいなくては」とか「～ができない私はだめな人間だ」「親も僕のことなんか恥ずかしいと思っているわ」「きっと、いらん子やと思われてる」「先生かて、『このクラスに何でおまえがおるねん』」と持っているにちがいない」等、案外私たちが思っている以上に子どもは、私たち大人がどう思っているかを気にしているのではと思います。

ですから、カウンセリングルームでは、「いるだけでOK」「あなたの好きなようにしていいよ」「無理に楽しむ必要はないよ」「そのままのあなたを受け入れますよ」という心づもりで、特に声をかけるでもなく、来ている子どもを認めることを心掛けています。

♪ **“甘さ”がほしい子ども・ほしくない子ども…「もっと砂糖をいれて」「味がちゃうなあ」
「おれは渋好みやで」「ストレートで」**

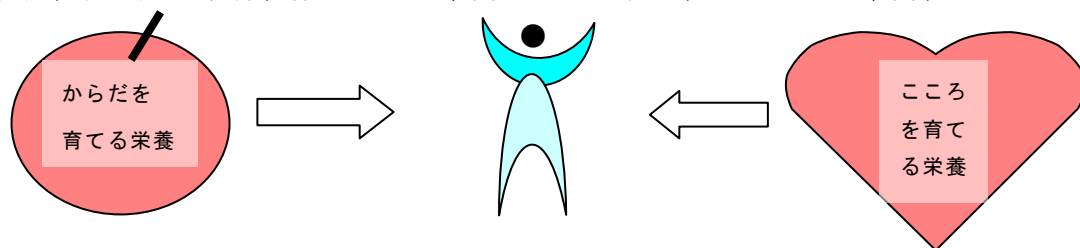
→心の“栄養”を与える、でも与えすぎない

何かといろいろ突っかかってくる子もいます。それがレジュメの2番目の「“甘さ”がほしい子ども・ほしくない子ども」というところです。

これは、別の市の随分前の話ですが、保護者も子どもたちも必死になって生きているというか、生活環境など、いろんなことが非常に厳しい地域の中学校に行っていた時の話です。その学校では学校の協力で昼休みに、1人1杯だけという形でミルクティーを作り、養護教諭の先生と一緒にカウンセリングルームでお紅茶を飲ませていたことがあります。100cc入るか入らないかのちっちゃなお茶碗に紅茶を入れ、お砂糖と粉末のミルクを入れて、まぜて子どもたちに飲ませる。

100ccほどのちいちゃなコップですから、ティースプーンに砂糖を2杯も入れたら十分なんです。ところが、ほとんどの子どもたちは「もっと入れてくれ」「もっともっと」と言うんです。ミルクも「もっと入れて」と言う。それで、1, 2, 3杯と入れる。「もっと入れやなあかん」4杯、5杯、「もっとやんか！良原さん、けちやな」とか言い出しどんどん入れさせる。すると、お砂糖が溶けなくなってジェルようになってくる。紅茶が、離乳食のようにドロドロになると「これがええねん」とやっと満足そうに飲む。「すごい。こんな甘くて、飲めるの？おいしい？」と尋ねると、にっこり笑って「うん、めっちゃおいしい」「うまい！」とズルズル言わせながら飲んだり、指ですくって飲み始める。

これは一体どういうことだろうと、養護教諭の先生やほかの先生たちとよくディスカッションをしました。生きものは、植物でも動物でも栄養がないと育ちません。そして動物、特に人の場合、体に与える栄養も大事ですが、心に与える栄養、この心に与える



栄養というのは、以前私が、金香百合さんという人の話の中で、“こころの栄養”という言葉をお聞きし、感動したことがあるのですが、その心に与える栄養ということがとても大事だと思います。この中学校の場合、「もっと甘くして」、「もっと砂糖入れて」という子どもたちは、現実の生活や環境がなかなか厳しいところから来ている子どもたちが多いわけです。ですから、“甘い生活”なんていうことはもうあり得ない。ですから、それが食べ物にも反映され、甘さを求めるという、そういうとても象徴的なことにつながったのではないかなと思います。

心が育つための栄養というのは、目に見えないのでわかりにくいですが、例えば子どもが育つ時期によって、栄養の中身が違います。種から芽が出たばかりの植物にすぐに肥料をやってはだめですね。初めは水だけ。それから葉がしげり始めた時の肥料、さらに花がついた時の肥料、実を实らせる時の肥料、それぞれの時期に与える肥料の中身が違うのと同じように、子どもが育っていく時にも、栄養の種類と与え方というものは違うのではないのでしょうか。

例えば、「これはすっごく上等の肥料やから早目にやっておこう」と言って、双葉しか出ていないところに高級な非常に刺激の強い肥料を与えても、それは逆に双葉をだめにしてしまう。双葉にとって、それは劇薬になる可能性がありますね。

しかし、花を咲かせるときにその肥料を与えると、とても美しい色の豊かな花を咲か

せる、これと同じように、子どもも年齢や発達に応じて、例えば1歳の赤ちゃんのときに与える栄養と、10歳の時、また15歳頃の思春期に与える栄養は違うのではないのでしょうか。時期によって違うわけです。

もう一つ大切なことは、花の種類によっても違うということです。アサガオにあげる肥料と桜に与える肥料は違いますね。だから、花によって違うのと同じように、A君に対してこういうやり方がよかったからといって、B君に対しても同じようにすることが必ずしもいいとは限らない。A君の心が育つための栄養が、B君にとってもいい栄養になるとは限らないのです。そこが子どもにかかわる私たち、大人が難しく、微妙に感じる場所だと思います。

よく保護者の方からのご相談に、「去年までは何の問題もなく、いい子だったのに、最近急に怒り出すようになった。『ご飯食べるの』と一言聞いただけで、『うるさい、黙れ』と怒鳴るのですが何がいけないのでしょうか、この子が変になってしまったんじゃないのでしょうか」。そういう相談を受けることがあります。

それは、その子どもの心が成長したということです。「子どもが成長したから、違う栄養を与えなきゃいけませんよ」というサインなのです。

心に着せる洋服が、去年の服ではもう窮屈になってしまったともいえます。目に見える洋服であれば、去年の服を着せたときに、「あら、袖が短くなってしまったわ」とか「ピチピチで窮屈になってるから、一回り大きな服を買わなくては」とはっきりわかります。しかし、心に与える栄養、心に着せる服は見えないんですね。ですから、窮屈になっていることに気づかなかったり、「去年と同じでいいわ」とつつい私たち大人は子どもに、その子どもの小さい時と同じような声かけや態度で接してしまいます。それを去年より成長した子ども側は、窮屈に感じたりうとましく感じたりするわけです。それは、こちらのやり方が悪かったのではなくて、「違う洋服に替える時期がきた」「違う種類の栄養が必要になりましたよ」というサインと感じていただけたらいいのではないのでしょうか。

“甘さ”についてのお話に戻ります。経済的にも生活的にも厳しい、保護者も子どもたちも必死になって生きている、その中学校の地域では、ところでは、子どもでさえもなかなか“甘い生活”というものを精神的にも物質的にも経験することが難しい。その子どもたちは、簡単なインスタントでできるミルクティー、彼らはそれをロイヤルミルクティーと呼んでいましたけれども、そのミルクティーの甘さが“こころが育つ”ための栄養としてとても必要だったのだと思います。「良原さん、ロイヤルミルクティーを飲ませて」と彼らが言った時、「いやあ、そんな上等なもん飲ませへんわ。普通のスーパーで買ったティーバッグの簡単な紅茶しか作れないよ」と言うと、何のことはない、コップにティーバッグをいれてお湯を注ぎ、砂糖とミルクを入れる、ただそれだけのものを彼らは“ロイヤルミルクティー”と呼んでいたんですね。

それを飲む時、彼らは「ああ、おいしい、おいしい」と満足そうに言う。「こんなにおいしい紅茶、どこで買ってきたん？」と言うので「その駅前のスーパーのバーゲンで買った紅茶や」と伝えますと「ええ！？そうなん？」と子どもたちが驚き、その中に「ほんなら、早速私も買って、家で飲もつ」と言った子がいます。

その子が翌週に「良原さん、あかんやんか、あの紅茶」「その紅茶のティーバッグと

同じのを買って家で飲んだけど、味がうかった」と言ってきたのです。すると、今まで黙々と飲んでた女子生徒が言ったんです。「当たり前やん。同じ材料でもな、家で飲むのところで飲むのとは味ちゃうねんで」と。私は、その言葉にすごくハッとしました。別の子が「何でなん？」と尋ねますと、「家はな、自分で作って一人で飲まなあかんやろ。ここでは、みんなでワイワイにぎやかな中で飲むねんで。しかも先生らが入れてくれるやん。そら、同じものでもな、味が変わるわ」とボソボソッと教えてくれました。

すると、ふだんやんちゃでワーワーしょうもないことを騒いでいる男子生徒たちがシーンとなってしまったんですね。「ああ、みんなにとって非常に重たい言葉を彼女は言ったんだな」というふうに思いました。そして、子どもたちは厳しい現実を背負って生きているということを実感しました。気楽そうにしょうもないことを言ってるけれども、実は、毎日突きつけられている現実には本当につらい、“辛い（からい）生活、苦い（にがい）生活”なんだなと。

ところが、その子たちが卒業して次の年、同じように昼休みに先生方とロイヤルミルクティーを出していた時のことです。カウンセリングルームにやってくる新3年生の中に、非常によい子と言われている生徒、勉強もできるし、スポーツも生徒会もやっているという、学年のスターのような子がカウンセリングルームに来たんですね。その男子生徒に、同じようにロイヤルミルクティーを渡そうとした時、彼が言ったんですね、「おれはストレートでええ」と。「えっ、ストレート？砂糖いらんの？」とビックリしていると、澄ました顔で彼はさらに「いらん、おれ、渋好みやから」と言う。「えっ、渋好みて…なんと中学生が…、えらい言葉やなあ」と思わず言うと、その彼の友達の1人がニタニタッと笑いながら「お前、何をカッコつけてるン」と言い、その「渋好み」と言った男子生徒の肩をバシッとたたき、「家で、〇〇ちゃんと呼ばれてるクセに」と言ったんですね。

その場にいた先生方が後で教えてくださったのですが、「おれは渋好みや」と言った彼は一人っ子で、かなり教育熱心なお父さんとお母さんがおられ、おばあちゃんもおられる、そういう環境の中で、いわゆる“いい子”で頑張ってきた。先生方から見ると、「ちょっと過保護やな」と感じられる面もあったようです。とても熱心な、ある意味行き届きすぎた家庭の環境にいた子どもだったらしい。その彼が「オレは渋好みや。ストレートでいい。甘いもんなんかいらん」という言葉、これもとても示唆深い言葉です。「これ以上の甘いもんはいらない！俺にはかかわらんといてくれ！放っておいてくれ！」みたいな感じでしょうか。ですから、彼はカウンセリングルームに遊びに来て、さっさとストレートの紅茶をもらったら、もう大人の私とは顔も見たくないという感じで部屋の隅に行き、友達たちと話をしたりして過ごしている。大人の方から声かけするのを許さない、そういう雰囲気も背中に漂わせていました。

ですから、砂糖は2杯がいいとか、10杯がいい、ストレートがいい悪いではなく、子どもによって違い、それをどのように見きわめていくか、そのためにいろいろな子どもたちとの会話、先程も風通しということを申しましたけれども、普段のとりとめのない話を通じてかかわっていくということが大事なことではないかなというふうに思います。

そうやって、それぞれの子どもの見合った、心が育つ栄養を与えていく。しかも、栄

養は与えればいっていいものではなく、子どもによって違い、さらに同じ子どもでも小学校1年生の時に与える栄養と中学3年生の時に与える栄養では違うのです。もしかしたらそれは、つい先月のA君と、今日のA君とでも違うかもしれない。特に、小学校高学年からは思春期という、心も体も嵐の時期に入っていきます。そうすると、昨日通用したことが今日は通用しなくなるということも出てまいります。ですから、たくさんの子どもと出会っていかれる皆さんは、一人一人、個性も発達も違うたくさんの子どもとかがわっていかなきやいけないわけですから、難しい役割を持ちつつ子どもたちに出会い、かかわっておられる、ということです。

☆ こころの成長のみちすじ

心の育ちに応じて、その心と与える栄養も変わっていくということを申しました。では、子ども心の発達とはどのようなになっているのでしょうか。次はそこを簡単に書いています。

♪ **赤ちゃんのころ…「この世」は安心できるところ**

赤ちゃんの頃は、“この世は安心できるところ”という安心感と安定感、これらを育てていくための栄養がたくさんあります。赤ちゃんは「おなかがすいた」とオギャーオギャーと泣くと、すぐにミルクが与えられます。「おしりの辺がモゾモゾして気持ち悪い」と泣くと、清潔なおしめが変わるという経験を毎日、そして1日に何回も経験します。食べ物や身体の清潔など、生活にかかわることを常に世話してもらう。つまり、体も心も気持ち悪くなったり不安になれば誰かが、必ず気持ち悪さを取り除くために抱っこしたりあやしてくれる、声をかけてくれる、かまってくれる、そのような経験の積み重ねから“この世は安心できる”という実感を育てていく、これが赤ちゃんの頃なのです。

最近、「見て見て」状態の子どもが増えたと聞きます。それも、「私だけを見て」という状態。ある小学校で、1年生の1クラスが学級崩壊になり、「大変だ！大変だ！」ということで校長先生にお招きを受けて行ったことがあります。ちょうどこれぐらいの季節に行かせていただくと、廊下側の窓が全部開いています。廊下を歩いていても遠くから教室の中が見えるんですね。遠くから見ると、女の先生の姿が何となく見えました。「大きな体の先生だなあ」と思って近づくと大きな体の先生ではありませんでした。後ろに1人おんぶしてはったんですね。さらに教室に近づいてくると、左手には1人抱っこしておられる。「まあ抱っこして、おんぶしておられるんだ」と驚きつつ教室の近くまで行くと、先生の腰の回りにもう1人が抱きついている。「なんとまあ」と思いながら教室に踏み込むと、先生はジャージのズボンをはいておられたのですが、そのすそを持って床に寝転がっている子がいた。先生は、ちょうど足し算を教えておられましたが、背後霊のように前にも後ろにも下にもいる。それを引きずりながら、数字を黒板に書いておられた。「これは一体何ということだ！」とすごくビックリしました。

みんながそうやって、「先生、私だけを見てちょうだい、かまってちょうだい」という形にいる。そこまで極端ではないにしても、とても安心感の少ない、心のその部分の栄養がもらえず、「その部分が十分に育てられた子どもが少ないようだ」とその学校の先生方からお聞きしました。

今の世の中は、「絶対大丈夫、絶対安心」ということ、そのような安心感を得ること

が難しい時代になってきたと思います。ご存じのように「有名な会社、大きな会社やから絶対つぶれない」とか「そこがつくった商品やから絶対間違いないわ」「子どもが学校へ行っていたら絶対安心」「学校にさえ行っていれば、何のトラブルにも事件にもかかわらずに勝手に大きくなる」そうではないことが、毎日のいろいろな報道から、私たちは思い知らされています。

さらに、「親にまかせておけば、絶対に大丈夫」ということもないですね。「学校でこの子はこんな問題で困っている、地域ではこんな悪さする。どうしたらいいだろう」となったときに、「まあ、親に言えば大丈夫やろう、あの親に任せよう」では済まない問題もたくさん出てきていますね。

すると、“絶対大丈夫”“絶対安心”ということが十分に育っていない、そのように感じられる子どもを地域はどう育てていくか、また安心感や安全が十分でない環境の中で子どもにどうかかわっていくか、この2つは非常に厳しい難問だと思います。

「育て方が悪かったから」とか「この子のここがこんなふうだから、だめなのだ」と単純には言えない時代になってきている。だからこそ、学校の先生だけ、保護者だけの力ではなくて、地域の、皆さん方のようなたくさんの手が、つまりサポートがすごく重要な役割を果たすのではないかなと考えます。

♪ 幼稚園・保育所に行く前のころ…こころ(自我)の芽生え

感じる「こころ」の基礎作り→感じる力、夢見る力、想像力(「私」の世界)⇔客観性

♪ 幼稚園・保育園のころ…何でもやってみる

一般的に幼稚園、保育所の頃になると、“いらんこと”をし始めます。「してはだめよ」ということを必ずやります。けがも増えてきますね。コマつきの自転車からコマ無しに乗れるようになるとか、三輪車に乗ってちょっと遠くまで行けるとか、活動範囲が広がってくる。

たいていの子どもは、「はい」という言葉の前に「いや」という言葉を先に覚えますね。ご経験のある方もいらっしゃるでしょう。例えば「靴を履いてお外へ遊びに行こうか」と言ったら「いや」、「じゃあ、おうちで絵本でも読もうか」これにも「いや」。こちらとしては「一体どっちなの!」と言いたくなります。このように「いや」ということを言う言葉を言うことによって、実は自分の心を確認している。それを反抗期、第一次反抗期と呼び、“自我が芽生える時期”と専門的には考えます。これはとても重要なことです。つまり“反抗する”ということはとても大事なことなのです。

そのときに、心の“感じる力”を作り育てていく。“夢を見る力”“想像力”。ですから、小学校へ行くまでは、我を張ったり自分勝手ということは実は、心が育つためにはとても大事なことと言えます。

♪ 小学校のころ…小さな失敗をたくさんする

「我が家では、王子様、王女様状態にいる」「わがママを言ってそれを許してもらえ」そういう安心できる、認めてもらえる経験をもつことが、小学校に入るまでに大切だということを今、お伝えしました。それが小学生、中学生の頃になると失敗を経験する中で「いけないことはいけない」「ルールを守る」ことを学ぶこととそれを学ぶプロセスの

経験が重要になってきます。先生に「ええかげんにせえよ」とか「だめやないか」と怒られながらも許されるという経験を積み重ねる。また地域でも、悪いこと、昔で言えばゴンタする、で、近所のおっちゃんに怒られたり、おばちゃんに「こらっ」と怒鳴られる。しかし、次の日は「おはよう」とあいさつをしてもらえる。「何しているんや」と怒られて「一生おまえとは口をきかへん」ではないんですね。「怒られた」の後に「許される」ことが大切なのです。小学生、中学生ぐらいまでは、悪いことをして怒られる、しかしその後、許されるという経験、失敗をして情けない思いをしたけれども、それでも認められたという経験。怒られたり失敗をした時に「おまえは地域から出ていけ」「二度と許さない」ではなく「こんなことをしたらあかん。もっとこうせなあかんねん。」とか「ここはそれではだめだけれど、こうするといいんだよ」ということをたくさんの大人に教えてもらい、その中で学んでいく。「もう何をやっているんや」と怒られながらも「しょうがないな」と許してもらえる、オッチャんの家の呼び鈴をピンポンダッシュして「ええかげんにせい」と怒鳴られたけれども、きちんと謝り、再びそのおっちゃんの家の前を通らせてもらう、そういうふうな経験が大事なことではないか。“being OK”というのはそういうことだと思います。子どもの心が育つためには、そのような経験の積み重ね、“being OK”の実感、それらがこころの栄養として大事なことではないかと思います。

♪ “すりきず(小さな失敗)”, “こぜりあい(けんか)”をたくさんさせる。

→ “結果”ではなく、“経過”を大切にする。

一緒に考える(「答えを出す・出させる」ではなく「答えが出る」のを待つ)

→「おとなごころ」も大切だが、「悩む」(悩みを抱える)力を育てる

何でもやってみる、それから小さな失敗をたくさんする。それは、その下の“はぐくみのために毎日の生活でできること”のところにも書いていますけれども、“すりきず(小さな失敗)をたくさんする”“こぜりあい(けんか)をたくさんさせる”ということです。

先程も言いました。私たちは、“おとなごころ”というものを持っています。親ごころであったり、先生ごころであったり、おっちゃんごころ、おばちゃんごころ、子どもを思ういろいろな“おとなごころ”というものを持っているんですね。「家や学校や地域の子ども、“うちの子”“かかわった子”はできるだけ幸せになってほしい、悩むことなく、失敗せずに成長してほしい」と私たち大人はそう願います。しかし、私たちは生きている以上は、悩みがないという状態にはなれないのではないのでしょうか。逆に言えば、悩みがあるということこそ、生きている証拠といえないのでしょうか。端から見たら、「そんなしょうもないことで悩んで」ということもあるでしょうが、どんな人も悩んでいたり気になることがあったり困ったことを抱えながら、そうやって大人は生きていると思います。しかも、その答えはなかなか見つけることはできないですね。算数の問題や学校の机の上で解いた問題のように簡単、単純にはなかなか答えが出てこない。人間関係は特にそうですね。先程の恋愛問題の相談もそうですね。正しい答えはない。人は成長すれば、そのような問題がたくさん出てくるわけです。

もちろん答えがすぐに出る悩みであれば、答えや解決方法を与えることもできます。しかしその一方で、「答えを出す、出させる」ではなく、「答えが出るのを待つ」「答え

がないまま、問題をもったままにいる」という経験も積ませていく。それは“悩みを抱える力”“悩むことのできる力”を育てることではないでしょうか。「悩む力って、変な力だなあ」と思われるかもしれません。“悩みを解決する力”も大事ですが、“悩みを持つ力”も育てる。ちょっと格好よく言うと、“葛藤保持力”と呼ばれています。つまり“ストレスを持つことのできる力”です。

ストレスや困っていること、悩みなど、あるよりはなない方がもちろんいいのですが、先程も申しましたように生きている限り、大人になっていく限り、悩みがないなんていうことはあり得ないのではないのでしょうか。

では、その“悩みを持つ力”をどうつけていくか。これは“生きる力”の1つです。しかし、小学生、中学生の子どもに、「これはあなたの悩みだから一人で考えなさい」「あなたの問題だから、自分で抱えていきなさい」ではまだ、子どもにとっては辛いですね。家庭や学校、それから地域でそういう子どもをどう支えていくか。子どもの中の悩む力をどう育てていくか、その1つのヒントとして、先程も少しお話ししました失敗に慣れる、失敗が認められる、失敗が許されるなど“こぜりあい”をたくさんする、“すりきず”をたくさんつくるという経験、これを小さい間に積ませることが大切と考えられます。

大人になってしまえば、法的な問題も出てきますし、仕事をしたり、家庭を持って、「しょうがない」と気楽なことばかりはなかなか言えなくなります。様々なことに対しての責任が出てきますから。もちろん小学生には小学生なりの責任、中学生には中学生としての責任というものはあります。けれど、まだまだ私たち大人が守ることのできるものがたくさんあります。その1つが“二つの経験”の欄の“人垣”“人ネット”ということではないのでしょうか。

★
二つの
経験
★

「あなたはいるだけで(being)すばらしい」といってもらえる経験
「人垣」「人ネット」と「居場所」

「失敗に慣れる」、「失敗を認められる」、「失敗が許される」経験

☆ はぐくみのために毎日の生活でできること

今日お集まりいただいている皆さんは、「はぐくみネット」という事業にかかわっておられる方々とお聞きしています。「ネット」という言葉を辞書で引きますと、“網目”とかいてありました。網というのは、いろんな輪がたくさんつながっているということですよ。

A君がいて、B君がいる。Cさんという大人がいて、Dさんもいる。それぞれの人がつながることによって、点と点は線になります。点と点がつながる、つまり人と人が結ばれる、そうするとそこに“つながり”という線ができるわけです。さらに、その線と線がつながる。1本の“つながり”と別の“つながり”がつながると、そこから今度は輪、面ができます。それが網、ネットになるわけですね。

ですから、この「はぐくみネット」という言葉は非常にすばらしい言葉だと思います。

まず点と点、人と人がつながって線という“つながり”になり、さらにネットにしていく。しかも、それは機械やハード面ではなくて、実際の子どもの同じ体温を持つ“人”が作っていくんですね。

今の世の中は、学校や地域もとんでもない事件や事故に巻き込まれる可能性があります。じゃあ学校の塀を高くすれば大丈夫か、インターホンをつければ解決するか、また監視カメラを町中に置けばいいのでは？とんでもない事件や事故から子どもの身を守る、安心して安全に過ごすための解決方法として様々な意見が投げかけられます。それも大事なことです。しかし、そのようなハード、機械の面の充実だけではなく、体温を持った、子どもと同じ温かさを持った私たち大人が、ソフトの面も充実させていく。その1つが、「人ネット」「人垣」というネット、これを作ることがとても意味ある重要なことのように思います。

ネットになると、いろいろな子どもをその上で受け止めていくことができるようになりますね。機械、カメラやインターホンは見つけることはできても、かかわること、救うことは難しい。しかし、人のネットは、その子どもたちを受け止め、抱えること、さらに包み込むができるのです。この「はぐくみネット」という、人のネットを作るとことは子どもを育てるにあたり、重要な1つのキーになると思います。

城のように石垣を高く積んだり、堀を作ったりして守るというやり方ではなく、人と人が手をつなぎ人垣を作る。その垣根は柔軟性に富み、いろいろな形に変化することができますし、途中の垣根の手と手を離し、入り口や出口を作り、子どもを入れたり出したりすることもできますね。そこが、やはりコンクリートの塀やカメラとは違う、人ならではの「人垣」「人ネット」の大きな特長、強み、長所ではないでしょうか。

ただ、ネットという言葉を辞書で引いていただくと、御存じの方もいらっしゃるでしょうが、もう1つ、“罍”“落とし穴”という意味もあるのです。「完璧なもの、絶対大丈夫ということが、今はない世の中だ」と先程申し上げましたが、ネットも同じです。穴があいているということは、そこから抜け落ちていくということもあるということ私たちは意識しておく必要があります。その上で、このネットで子どもを守り、育てていくということが、地域の力として大事なことです。

♪ あいづちの言葉をたくさんもって、子どもの話を子どものペースで聴く。

★ 安心(して話が)できる雰囲気をつくる。

では、具体的にどういうことが毎日の生活でできるのでしょうか。レジュメにいくつか書かせていただきました。これはいろいろなPTAの方の集まりでもお話ししていることですが、一番にお伝えしたいのは、「あいづちの言葉をたくさん持つ、子どもの話を子どものペースで聴く、安心して話せる雰囲気を作る」ということです。

あいづちってたくさんありますよね、「ふーん」とか、「へー」とか、「ほー」「ひゃーほんま」「なるほどね」「それから」、今言っただけでもこれだけあります。また「ふーん」といっても、「ふんふん」もあれば「ふっふーん」とか「ふうふーん」などいろんな「ふーん」がありますね。ですから、まず様々なあいづちをもって子どもの話を聴く。

そうしていると、子どもの話ですからどうしても時系列にきちっとしゃべれませんが、

都合の悪いところは省きますし、つじつまの合わないことも一杯でてきます。「今日な、A君とB君と一緒に帰ってな、こんなことがあって、あんなことがあったらな、急に、B君とCさんがけんかして、ほんでな、腹立つからいうて、僕、D君とEさんと帰ってん」なんて話を聴くと、「えっ、CさんとD君、Eさんはいつからいたの」とか「じゃあ、A君はどうなったんだ」など、こちらはいろんな矛盾が気になるのですが、とても大事な質問であれば、子どもの話が一番最後まで話し終わってから聞くということが大切です。ついつい、「Cさんはいつからいたの?」「A君はどうなっちゃったの?」と途中で尋ねたくなりますが、最後まで子どもが話してからにする。それまではあいづちを打って聴いている。そうすると、子どもはたくさんのお話をしてくれると思います。

♪ 二つのメッセージを同時に送らない。“カーブ”を投げない。

★「～してもいいよ」とこわい顔で言う。

2つ目に申し上げたいのは、“2つのメッセージを同時に送らない”ということです。これもよくお話させていただくことですが、ある中3の男の子が、2学期、12月にフラックと昼休みにやってきて言ったことがあります。彼がカウンセリングルームに入ってきた時、いつもと様子が違い、あまり元気がありませんでした。少しそっとして様子を見ていましたら、彼が「先週、テストあってん」とポツリと言いました。ちょうど期末テストが終わった頃でしたので、「点数がよくなかったのかな」と思いながらも「ああ、そうやったみたいやね」と返事すると、「テスト中やから早いこと学校が終わるやろ」と言うので「うん、そうやな」と私。「ほんでな、3日間テストあってな、1日目のテストの日に事件が起こってん」と彼が言う。もうどんな事件が起こったんだろうとドキドキして聞いていました。彼は、将来、映画監督になりたいという夢を持っていて、いろいろな映画、昔の映画をたくさん見るのが好きな少年で、いろいろな映画の話をよく私にもしてくれました。うまい具合に、彼の家近所には小さな映画館があり、そこでよく、昼間、昔懐かしの映画等を上映していたそうです。それでそのテスト1日目の昼も、午後から彼が前から見たいと思っていた映画が上映される予定になっていた。上映日はその日、1日だけです。彼は、どうしてもその映画が見たい。でも試験中ですよ、しかも、お分かりの方もいらっしゃると思いますけれど、中3の2学期、12月のテストというのは、受験校や内申など今後のいろいろなことを考えるためのとても大事なテストなんですね。ですから、必死に取り組まなきゃいけないテストなわけですね。

ところが、その1日目にどうしても見たい映画がある。彼はかなり迷ったけれども、仲のいい友達も、「僕も一緒に見に行きたい」と言うので、思い切って、一緒に見に行く約束をして帰ってきた。そのときに、彼には1つ計算があったんです。「今日は火曜日だ」と。「火曜日は、お母ちゃんは地域の公民館の卓球教室に行っている」だから「お母ちゃんは、多分午前中はいない」だから「僕が帰ってすぐご飯食べて出かけたら、お母ちゃんにわからんと出かけられる」。彼にはそういう勝算があって約束して帰ってきた。ところが帰ってきたら、お母さんがいる。彼はビックリして、「何でいるん?」と尋ねたら、「あんたも今が正念場。そんな時にお母ちゃん、のんきに卓球なんかしてられへん。昼ご飯からごちそう作ったで」と張り切っている。彼は「やばい」と思った

けれど、もう友達と約束しているので、今さら変更できない。恐る恐る「お母ちゃん、今日あそこの映画館で、1時から何々という映画があるねん。僕、どうしてもそれを見たくて、何々君と約束してきてん」と思い切って伝えたそうです。ところが、お母さんは表情がパッと変わり、「好きなようにしたら」と一言だけ言って、あとは口をきかなくなってしまうたんですね。

彼はまずいと思って、「見に行こうと思ったけれど、あいつに電話して、見に行くのをやめようかな」と言ったら、お母さんがまた一言、「友達との約束を破る気か」と顔を見せずに低い声で言わはった。彼は、それで、「あっ、行ってもいいのかな」と思い、お母さんが作ってくれたカツ丼を食べて出かけ、夕方に「映画おもしろかった。よし、帰ったら次はテストや。勉強頑張るぞ」と思って帰ってきた。しかし、「ただいま」と言ってもお母さんは、「お帰り」とは言わない、「きょうの映画、おもしろかったで」と彼が言ってもお母さんは、台所で流しの方を向いたまま、こちらを向かない。そして背中ごしに、「中3のこの時期に大した度胸やな」と一言だけおっしゃったそうです。彼は、ムカついたそうです、何にムカついたかといえば、「おかん、はっきりしてくれ」ということなのです。「あかんのやったらあかんとはっきり言うてくれ」そして「映画を見てもよいのならば、にっこり笑って送り出し、迎え入れてくれ」という。「怖い顔をして行きと言う、それはないやろ」と、「何がいたいんや、どっちやねん、お母ちゃんはいつもそこがわからへん」そのようなことをワーッと話してくれました。

この話は後日談もあって、その後、テストの点が返ってきたのですが、案の定というか、やはり思うような点ではなかったそうです。そうすると、また後で彼が言うには、三者懇談の場で「お母ちゃんは、そこで過去何年もさかのぼるんや」と。どういうことかと言うと「テスト中に映画なんか見に行ったから点が悪いのだ。そういえば…」に始まり、「1学期にもこんなことがあって…、あ、中2の時にはあんなこともあった、小学校のときも…」となり、最後の留めに「あんたは小さいときから親の言うことを聞かない子やった」と言われたそうです。「あんまりやと思えへんか」と彼はため息をつきました。「なるほど」「ほんまやな」と、私は自分のことを言われているかのような、ちょっと耳が痛かったんですけども。

「何々してもいいよ」と言う時、こちらは気に入らないけれど子どものやりたいことをやらせる時には、決して怖い顔で言わないということです。にっこり笑ってやらせる。怖い顔をして言うときは、ノーという言葉の時です。そしてノーという言葉は笑い顔では言わない。そうでないと、子どもは混乱します。小さい子どもであればあるほど。

お母さんと一緒に相談に来た幼稚園の男の子のお話しをします。彼は1人でエレベーターに乗れないという相談で来ました。彼は文字や数字が大好きな子どもで、漢詩も読めるし、なんと連立方程式も解けるというすごい子だったのですが、「1人でいることができない」「エレベーターなどの狭いところに入るのが怖い」という相談です。その男の子とお母さんの3人でお話しをしていた時に、お母さんが何かでちょっと席を離れた隙にコソッと彼が私に教えてくれたことがあります。それは「良原さん、お母さんはね、ここではニコニコ笑っているけれど、家へ帰ったら鬼のようだよ」と。彼が言うには「笑って『そうですね、そうですね』と2回言っているときは、本当は納得してない時だよ」と。「そうなん!」と私がすごく驚くと彼は深く頷いて「だからね、良原さんもね、お

母さんが笑って『そうですね』と2回言っているときは気をつけてね」と大人びた顔で言うので思わず「うん、わかった、気をつける」って言ってしまいました。このように子どもは、大人の特に家族や身近な人の心に対して、私たちが思っている以上に敏感であり、読みとろうとすることがあります。

先ほどの肩もみの時に、{バーバル=言葉も大事}、{ノンバーバル=言葉以外}のサインも大事だとお話ししました。口では「いいよ」「イエス」と言っているけど、顔が違う、態度が違うということは、言葉で表現したものと顔や表情で表現したことが違うということになり、子どもは混乱します。「どちらにすればいいんだろう」と。

子どもなりにだんだん要領をつかんでくると、「『いいよ』と言ってるけれど、あれは本当は『ノー』の意味だから、その対応をしておこう」というふうになるわけです。すると、大人の顔色を常に見るとか、裏読みをするという形になり、コミュニケーションが直球でなかなか勝負できないというか、変化球でしかコミュニケーションができなくなるわけです。

そういう意味で、できるだけシンプルに。怒るときは怖い顔で怒る。許可を与える時や楽しい話をするときは、楽しい顔をして伝えることが大切ではないでしょうか。

♪ 「**困った子ども**」ではなく「**困った問題をもつ子ども**」という視点をもつ。

困った状態(の子ども) → **信号を出している子ども**

最後に書いています「困った問題をもつ子ども」はどこにでもいますし、どのような子どもにでも“困ったこと、困った状況”は起こります。「この子がだめだから」とか「この家があかんから」ではなくて、「困った問題を持つ子ども」「困った問題や気になる問題を抱える家」という形で考えていくと、違う面が見えたり、違った角度からの視点をもつことができる時があります。

気になることや困ったことは、“問題のある行動”というものは、確かに困るし、悪いことである場合もあります。しかし、よくよく見ていくと“意味がある”“役に立つ”場合もあるんですね、もっと言えば“よいこと”である場合もあります。

先程お話しした幼稚園の男の子のことをもう少しお話ししましょう。彼は幼稚園に行っていなかったのも、そのこともお母さんは心配していました。何回目かに来室した時、彼が「あのね、幼稚園に行ってる場合と違うの」と言う。「どうして行っている場合と違うの？」と尋ねると「夜にお父さんとお母さんはすごい喧嘩をしてね、お母さんが『こんな家、明日、出ていくわ』って言ったの」と。「お母さんが出ていくかもしれないのに、僕、のんきに幼稚園に行っている場合じゃないでしょうか？」と真面目な顔で言う。「でも本当は、お父さんはお母さんのこと大好きだよ。お母さんだって、お父さんのこと大好き。僕はお父さんもお母さんも大好き。だから、お母さんが出ていかないように僕がお父さんの代わりに見張っている」

凄いな話というか、まあ何とかな話でしょうか。たった5歳、6歳の子の言葉に感動もしましたが、やはりショックを受けました。この子が幼稚園に行かないのは、「この子が弱い、甘えているから」とか「お母さんとお父さんがけんかばかりしているからだめだ」とか、そういうことじゃないんですね。“幼稚園に行かない”という“困った問題”を起こすことによって、お母さんが出ていくことを止めていることができているわ

けです。もっと極端に申せば、この子が“幼稚園に行かない”ことで、お母さんはこの家に留まることができ、お父さんとお母さんは喧嘩をせずに、穏やかな声でこの子どもについて話し合うことができるわけです。いつもは「忙しい、忙しい」「家のことはお母さんに任せている」と言うお父さんが、例えば「学校に行かない」「原因不明の微熱が出る」「おなかが痛くなる」という困った問題が起こることによって、その忙しい仕事のやりくりをして帰ってくる。休日を取って、家族を車に乗せ、大きな病院へ精密検査を受けに連れていくというような、お父さんの協力、助けを引き出すことができるようになるんですね。

ですから、“困った問題”“気になること”とは必ず意味があります。もしかしたら、何かそれでうまくいっていることがあるかも知れない。そういうふうに考えますと、困った問題、気になることというものの視点が変わってくるのではないのでしょうか。

きっと今日、ここにいらっしゃる皆さんは、地域のいろいろな方々の相談にお乗りになることもあるでしょうし、それから、たくさん子どもたちにかかわり、いろいろな子どものいろいろな点にお気づきになることもたくさんあるでしょう。そのときに、人のネットワークというものを持ちながら、その中でいろいろな子どもを、今申し上げたような、「何かこれには意味があるのではないか」という視点をもっていていただき、そのネットですくい上げていただくことがとても期待され、求められていることではないかなと思います。

ちょうど時間になりましたので、私の話はこれで終わらせていただきます。

どうもありがとうございました。